ヨコハマの子ども・若者の成長を応援する人たちへ

YOKOHAMA EYE'S 2018

ヨコハマ　アイズ　2018

YOKOHAMA
EYE'S 2018
公益財団法人　よこはまユース

特集 1　地域のパートナーシップが若者の未来を描く先駆的な若者支援のしくみ

1 困りごとをまんなかに地域をつくる

2 市ケ尾中学校・市ケ尾高校の生徒による、まちの未来づくり
市ケ尾ユースプロジェクト

特集 2　若者も地域も元気になる！～持続可能な活動を目指して～

1 青少年の地域活動拠点は、なぜ必要なのか
～寄り添い型健全育成のすすめ～

2 子どもたちはいつだって、自分自身で成長する
～青少年交流・活動支援スペースの事例から～

3 <横浜市子ども会ジュニアリーダー座談会>
地域活動の魅力～若者がジュニアリーダーを続ける理由～

4 地域通貨「べる」をつかった青少年支援の現場
京都市山科青少年活動センター

データで見る青少年

横浜市内の中高生と保護者に聞いてみました
中高生の放課後の過ごし方や体験活動に関するアンケート調査レポート

公益財団法人　よこはまユース

はじめに

「ＹＯＫＯＨＡＭＡ　ＥＹＥ’Ｓ　２０１８」をお届けいたします。

東京オリンピックの開催を来年に控え、現在横浜でもホテルの建設など準備の気運が高まってきています。また、４月からは出入国管理法の改正により私たちの町でも多くの外国人と接する機会が増えてきます。そのような中、地域では、青少年・若者が自身の力を活かして新しい地域（関係）を創り、活性化する取り組みが少しずつ始まってきています。

本特集では、『地域を創る青少年・若者たち』をテーマに、横浜や各地で行われている先駆的な取り組みをご紹介します。

特集１では、「人と人」とりわけ「大人と若者」との関わりを活性化することで、地域を紡ぎ直していく広域な取り組みを取り上げました。

特集２では、青少年の地域活動拠点など、地域で行われている若者の主体的な取り組みを拾い集めました。

また巻末には、中高生の放課後の過ごし方や体験活動に関するアンケート調査の結果を掲載しました。中高生の「家」と「学校」以外での過ごし方を考察する際の参考にしていただければ幸いです。

これからもよこはまユースは、青少年ならびに市内青少年団体のサポート役として使命を果たしてまいります。皆さまにおかれましては、引き続き横浜市の青少年活動にご理解・ご協力をいただくとともに、冊子についても忌憚のないご意見をお聞かせいただければ幸いでございます。

2019 年３月末日
公益財団法人よこはまユース
代表理事　　大向　哲夫

YOKOHAMA　EYE'S 2018 目次

特集 1　地域のパートナーシップが若者の未来を描く　先駆的な若者支援のしくみ

1 困りごとをまんなかに地域をつくる …… 4

執筆者：津富 宏（NPO法人 青少年就労支援ネットワーク静岡）

2 市ケ尾中学校・市ケ尾高校の生徒による、まちの未来づくり
市ケ尾ユースプロジェクト …… 8

執筆者：竹原 和泉（特定非営利活動法人 まちと学校のみらい）

特集 2　若者も地域も元気になる! ～持続可能な活動を目指して～

1 青少年の地域活動拠点は、なぜ必要なのか
～寄り添い型健全育成のすすめ～ …… 10

執筆者：林田 育美（つづきMYプラザ）

2 子どもたちはいつだって、自分自身で成長する
～青少年交流・活動支援スペースの事例から～ …… 12

執筆者：櫻井 久美子（公益財団法人 よこはまユース）

3 <横浜市子ども会ジュニアリーダー座談会>
地域活動の魅力～若者がジュニアリーダーを続ける理由～ …… 14

企画：公益財団法人 よこはまユース　事業企画課

4 地域通貨「べる」をつかった青少年支援の現場
京都市山科青少年活動センター …… 17

執筆者：玉村 文（公益財団法人 京都市ユースサービス協会）

データで見る青少年

横浜市内の中高生と保護者に聞いてみました
中高生の放課後の過ごし方や体験活動に関するアンケート調査レポート …… 19

1　困りごとをまんなかに地域をつくる

ＮＰＯ法人 青少年就労支援ネットワーク静岡
津富 宏

私たちの就労支援：静岡方式

2002 年から、私たち青少年就労支援ネットワーク静岡は、静岡県で「働きたいけれども働けない人々」が一人でも少なくなるようにと願って活動してきた。私たちは、私たちの支援の仕方を「静岡方式」と呼んでいる。まず、その考え方をお伝えしたい。

支援しない。応援する。

「支援」の「支」とは「支える」という意味である。支えを外してしまえば、支援されている人は、下に落ちてしまう。そういう意味で、私たちの支援は「支援」ではない。本人の人生は私たちのものではなく、あくまで、本人のものである。

私たちは、本人が自分自身の人生を送るのを「応援」する。マラソンをしていると、観衆の声援が力になるという。そこでいう声援は、たった一人によるものではなく、多くの人々によるものだ。つまり、私たちが作り出そうとしているのは、困っている人たちの「応援団」である。応援の仕方は、さまざまであってよい。

マラソンなら、前日に「がんばれ」とラインメッセージを送っていい。「終わったらご飯に行こう」と誘ってもいい。当日、会場まで送り迎えしてもいい。一緒にマラソンに出てもいい。ドリンクを手渡してもいい。写真を撮ってあげてもいい。そして、声援を送ってもいい。

私たちの応援の仕方は多様でいい。応援の仕方は、あらかじめ予定されたものとしてではなく、応援される人と応援する人の相互作用の中から生み出される。

私たちは地域そのものである

応援団とは地域である。地域には困りごとがあり、私たちはその当事者である。困りごとはたった一人で解決するのは難しい。だから、私たちは力を合わせて、困りごとを解くために応援し合う。

「人民の、人民による、人民のための政府」というリンカーン大統領の言葉がある。私たちがやっているのは、「私たちの、私たちによる、私たちのための地域」をつくることだ。私たちは、地域の構成員（メンバー）として、この地域に責任を取り、自分たちのために困りごとを解く。

ここでいう地域とは、私たちの関係性全体、つまりは、ネットワークのことである。だから、静岡方式では、関係性を紡ぎ直して、地域を再組織化する（リ・オーガナイズする）。私たちは、図（出典　津富宏＋青少年就労支援ネットワーク静岡 2017）のように、困りごとを真ん中に人と人がつながり、地域を覆いつくすことを目指す。

その意味で、私たちは、地域のオーガナイザー（コミュニティ・オーガナイザー）でもある。

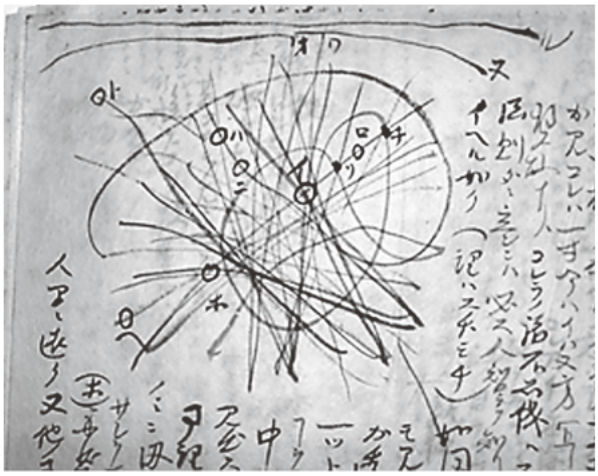
地域を紡ぎ直す

つまり、私たちは、ひとりひとりの困っている人を支援する団体ではない。わたしたちがやっているのは、地域を紡ぎ直すことである。その過程で、さまざまなドラマ（化学反応）が起きて、自然に問題が解けていくことを期待しているのだ。

地域を紡ぎ直すために大切にしているのが、萃点（すいてん）という概念である。萃点とは、南方熊楠の描いた南方マンダラの中心（右図の「イ」）である。鶴見和子は、萃点について次のように言っている。

さまざまな因果系列、必然と偶然の交わりが一番多く通過する地点……そこから調べていくと、ものごとの筋道は分かりやすい。・・・そこですべての人々が出会う出会いの場、交差点みたいなもの……非常に異なるものがお互いにそこで交流することによって、あるいはぶつかることによって影響を与えあう場―それが萃点

（出典　鶴見和子『南方熊楠・萃点の思想』藤原書店）



私たちが、萃点という概念を大事にしているのは、これまで、若者支援で強調されてきた、居場所という概念を乗り越えるためである。地域から閉ざされた居着く場所としての「居場所」ではなく、地域に開いた人と出会う場所としての「萃点」を地域につくる。困りごとを取り巻く、小さなネットワークは「萃点」そのものである。私たちは、地域に萃点を増殖させ、地域を萃点で覆いつくしていく。

萃点（すいてん）
https://ameblo.jp/us1234533/entry-12262849385.html
から（出典　南方熊楠 1975『南方熊楠全集第 7 巻』平凡社）

化学反応を引き起こす

私たちの萃点は、困りごとを真ん中にした開かれた場である。そこには、さまざまな人々が流れ込み、その想定を超えた展開を生み出す。つまり、私たちの応援は、アセスメントに基づいて計画されるのではなく、想定外を生み出す意図的な仕掛けの上で展開する。

ある困りごとがあるとき、それを応援したい人が 5 人集まるとしよう。そもそも、どの 5 人が地域から集まるかは、タイミングや人と人の繋がりの結果として、偶然の結果である。さらに、その 5 人が、応援する内容も、どのような相互作用が最初に起きるかによって、連鎖的に、その後の応援の仕方が影響される。

私たちにとっては、事前に何が起きるかはわからない。しかし、分からないからこそ、偶然の力が働いて、素敵なことが起きる。事態を手放すことで、化学反応が起きる。日々起きている化学反応に背中を押されているのが私たちである。

対談：ごちゃまぜの地域で応援される若者たち

私たちの支援の現場で起きていることを知っていただくために、私たちの現場におられる、**池田佳寿子さん**（地域若者サポートステーションかけがわ）と、**渡邉慈子さん**（富士市若者相談窓口　ココ☆カラ）に対談をお願いした。聞き手は、私の勤務している静岡県立大学の卒業生で、この NPO のボランティアもしてくれた**二條麻由子さん**である。

若者とボランティア（ボランティアサポーターのこと）の関わりについて

二條

1 人の若者にボランティアがどう関わるのか。

池田

3、4 人つくようにしている。同じ地域、レアな趣味が繋がりそうな人、あと 1 人は共通項がないお門違いの人をいれる。たまたまそこにいたから関わることもある。趣味の話だと盛り上がるからいい。ただ世の中には合わない人もいる。最初合わなさそうだなと思った人と仲良くなったりするし、その逆もあり。いろんなハプニングも楽しめるようにと最近考えている。

渡邉

人目を避けてきた若者は、顔見知りではないから話ができることもある。そんな若者にボランティアさんたちは寄ってたかってみんなで関わる。ドライブにいく、写真を撮りにいく、サイクリングに行くなどあっちこっちで勝手に何かが巻き起こっている。お寺の副住職が若者を呼んでお茶会をしたりもしている。米などの差し入れもあり、一緒に料理を作って食べる。月に一度 100 個くらいのおにぎりを握って、昼食も夕食もみんなで一緒に食べながら話をする。あそこにいけば誰かがいて何か

が食べられるという日がある。私たち団体が受託している富士市若者相談窓口 ココ☆カラは富士市教育プラザ内にあるが、そこの職員さんやお掃除の方がみんなボランティアになってくれていて若者に声をかけてくれる。その後ろを若者がくっついて掃除を手伝ったり、休憩時間に丸くなって一緒に話をしていたりしている。

池田

マラソンに興味のある若者がいて、マラソンに出ることになった。（一人では不安なので）ボランティアさんを誘ったら、「僕なんて無理ですよ」と言っていたが、その方が代わりに職場の方で参加できる人を探してきた。また女性のボランティアさんは「私は無理だけど旦那が一緒に走るよ」といって連れてきた。ところがマラソンの人を集めることに必死になりすぎて、参加費があるってことを誰も知らなかった。あわてて貯金箱を用意して呼びかけたら、ほかの地域のボランティアさんがみんな募金してくれた。

巻き込まれる

渡邉

気がついたら巻き込まれている。マラソンもそうだし、不登校や長く引きこもっていた若者が働きたいという他の若者の企業見学や就労体験に行く時に、一緒にドライブに行こうと誘われる。するとうっかり次の日から働いていたりすることがある。

池田

巻き込まれて働いちゃった子に「なんか働いてるらしいじゃん」って言ったら「そんなつもりはなかったんですけど、なんかいつの間に働いてたんですよ」ってはにかみながら話してくれることがある。

渡邉

一対一ではなくごちゃまぜだから起こること。「学校が、、、」とか「就職はまだ、、、」といっていた若者が違う方向にむかっている。それは私たちが仕組んだり場を作ったりできない。勝手に化学変化を起こしている。

池田

自分たちがやっちゃうと、どうしてもコントロール的になる。私たちが想像できないことが起きる。

若者が地域の担い手に

渡邉

コロッケをたくさん差し入れてくれたボランティアがいて、「これ食べてもいいんですか」って聞いた若者がいた。彼は働いた最初の給料でコロッケを買ってきて「僕が初めてきた時にコロッケもらってうれしかった。自分も同じことをやりたいたいと思った」と。してもらったことを誰かに返していくということ。何か辛いことがあった時に、良くしてくれた大人が居たっていうモデルがあると、自分も大人になった時に誰かにやってあげたいなという気持ちになるのはすごいなって思う。ボランティアを増やしていくと同時に、私たち自身が人としてどう関われるかが大事。

池田

何か親から叱られる要因があって、逃げたいけれど「そこに座って、ちゃんと話をききなさい」って言われる。うちに来る若者たちは割と目を合わせたり、正面切って座って話をするのが苦手だったりするので、ボランティアが歩きながら話をする。競歩になって、ハアハア言ってるんですけど、同じ方向を向いてる方が話しやすいという経験を彼はしている。だから彼は自分がボランティアになった時も真正面には座らない、そういうのってすごい心を使ってるなと思う。

渡邉

自分がしてもらって良かったことはするし、嫌な事はしない。しんどい気持ちは経験したことのある人しか分からない。彼らはそういう部分ですばらしい人財。そういう若者達が大人になったら、痛みのわかる置いてきぼりがない地域を作っていくと思う。そういうバトンの渡し方をしていくこと、地域づくりってこれだよなと思う。

みんなで関わる

池田

個人情報や辛いことを何度も話してもらうのは大変、でも一緒に聞けば、3 人だったら三分の一になる。シェアできるから同じ仲間として聞ける。楽しいことだと倍増する。それだったら共生していった方がいい、それが私のポリシー。

二條

みんなで聞くようにするのですね。

池田

同じ意見の機関もあれば、対照的な場合や少し違うこともある。でもそれを本人と共有することでいろん

な考えの中から本人も選びやすくなる。1つしかないとしんどい。近道や正しい事が正解じゃない。良くも悪くも、後でそういうこともあったなと思える。

二條

「支援する」というのはよく「私たちが○○する」と囲ってしまうイメージがありますが。

渡邉

野球の応援団みたいに太鼓がいたり、チアリーダーがいたり、いろんな人がプレーしている人を応援している。ジーっと見守る人もいるかもしれない。

池田） 私たちは「支援ではなく」応援と言っている。みんな応援できるし、応援してもらっていい。

おわりに

私たちは、シンプルに、人の善性を信じている。人は、困っている他者を放っておけない。できる範囲でできることをしたい。私たちは、若者たちに、そういうやりとりのある地域で生きていることを実感してほしいし、その仲間になってほしい。困りごとを抱えた若者たちは応援されるだけなく、応援団でもある。私たちは、困りごとをまんなかに、相互扶助の地域をつくっている。

静岡方式を知るための本
津富宏 +NPO 法人青少年就労支援ネットワーク静岡　2017 『生活困窮者自立支援も「静岡方式」で行こう！2 相互扶助の社会をつくる』クリエイツかもがわ
津富宏 +NPO 法人青少年就労支援ネットワーク静岡　2011 『若者就労支援「静岡方式」で行こう！！
―地域で支える就労支援ハンドブック』クリエイツかもがわ
（電子書籍で入手可 https://www.molcom.jp/products/detail/118937/）

２ 市ケ尾中学校・市ケ尾高校の生徒による、まちの未来づくり

市ケ尾ユースプロジェクト

特定非営利活動法人 まちと学校のみらい
代表理事　竹原　和泉

市ケ尾ユースプロジェクトの背景と大事にしたこと

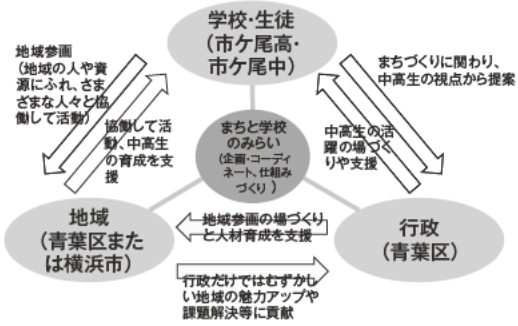
「市ケ尾ユースプロジェクト」は、中高生と豊かな経験を持つ大人とが力を合わせ、まちづくりの課題やまちの魅力アップに取り組むことで、多世代交流によるこども・若者の育成支援を行う活動です。

青葉区役所と NPO まちと学校のみらいの協働事業として、市ケ尾高校、市ケ尾中学校と検討を重ね 2017 年度からスタートし、今年度は中学生 30 名、高校生 10 名が参加しています。

プロジェクトを企画した背景には、２つの“もったいない”があります。

◆青葉区にはさまざまな経験をもつ人材がいるにもかかわらず、地域の活動に参画できていない人も多い。

◆中高生のもつ力、ポテンシャルは高いにもかかわらず、地域や実社会との接点をもつ教育活動が多く行われているわけではない。



地域の大人への呼びかけは、青葉区のシニア世代の地域参画をうながす「あおばセカンドキャリアフォーラム」で行われ、「あなたの力の１パーセントをあおばの未来に！」を合言葉に次世代育成に関心のある 20 名の方が参加、まず「生徒の話をじっくり聴き、先回りせずに生徒の意見を引き出し、サポートに徹する」ことをワークショップ形式で確認しました。さらに教職員対象には「新しい時代に必要な資質能力の育成に向けた地域協働の重要性について」の研修を実施し、大人の共通認識を図りました。

中高生の課題意識からまちづくりへ ～活動のプロセス～

中高生がまちの課題解決や魅力づくりについてまず自分自身で考え、他のメンバーと意見交換をした後、似た考えの人がチームをつくりました。そのチームに大人が加わり、それぞれの活動がスタート。毎月１回程度、中学生の下校時間に合わせ１時間半程度のワークショップを実施しました。今年度は「まちづくり」「まちの安全」「多世代交流」「まちの魅力発信」「イベント企画」「地産地消」「プロジェクト広報」のチームができました。

「まちの安全」をテーマにしたチーム「まもる」はいつも歩いているまちの危険や安全を考えたいと中学生３名と高校生２名が集まりました。①課題意識の共有　②フィールドワーク　③区役所地域振興課との意見交換　④アンケート作成・依頼・配布・集計　⑤アンケート結果に基づき土木事務所との意見交換　というプロセスを経ています。

アンケート作成では地域のプロボノ*[1]の協力をもらい、町内会で説明、行政担当者と意見交換をしました。今後は「自分たちのできること」「行政に提案すること」「町内会等と一緒に考えていくこと」等、課題解決に向けて動く予定です。

中高生の学び、大人の学び

このプロジェクトで中高生は大きく成長しました。大人たちへの「信頼」が増し「コミュニケーションする意欲と技術」が高められました。何よりも地域の「リアルな課題に向き合うこと」で教科書等では学べない、ホンモノとの出会いがあったから、地域課題等を自分事として考えられました。

プロジェクトに参加した中高生の感想

★自分たちの住むまちを自分たちでつくっていくという活動に共感したので参加。自分の発想や発言が市ケ尾を豊かにすることを知りました。（中学生）

★最初は、人前で話すのが苦手だったけど、何回も話していくなかで、勇気をもつことができました。（中学生）

★実際に自分自身で地域社会の現状や社会問題と向き合ったり、大人の新鮮な知識や意見を聞けたりしました。（高校生）

★自分の将来像、やりたいことがもともと漠然としていたのですが、何となくできあがりました。（高校生）

スタート時「まちづくりは大人がするものだと思っていたけど、私たちもかかわれると思うとワクワクする」と言っていた中学生が、半年後にチームの一員として自分の言葉で語る姿を見て、大人たちは感激しました。中高生は大人でも悩んだり、わからないことがあること、困った発言をする人もいることを知り、「まちづくりは正解のないものにチャレンジし、みんなで創っていくものだ」ということを知ったのではないでしょうか。

中高生を経験豊かな志ある地域の方々がサポートするプロセスで、多くの出会いと学びがあり、世代を超えたチームができました。中高生は教科書にはない体験的に深い学びをし、まちの担い手としての実感を持ったことでしょう。そして大人もまちづくりの醍醐味と次世代育成にかかわる喜びを得ることができました。

このプロジェクトによって新たに市立中学校と県立高校、地域の団体・企業そして今まで地域活動には顔を出していなかった地域の人がつながりましたが、その核になったのは中高生の存在であり、まちの未来をつくるという共通のミッションでした。

今後スタートする社会に開かれた教育課程でも「身近な地域を含めた社会とのつながりの中で学び、自らの人生や社会をよりよく変えていくことができるという実感を持つことは、困難を乗り越え、未来に向けて進む希望と力を与えることにつながる」と記されていますが、このように中高生が社会のフルメンバーとして活動する経験は、次世代の担い手となる確かな一歩になることでしょう。

(Endnotes)

*[1] プロボノとは、ラテン語で「公共善のために」を意味する「pro bono publico」の略で、専門家の知識・スキル等をいかして社会貢献するボランティア活動や、それに参加する専門家を指す。

1 青少年の地域活動拠点は、なぜ必要なのか ～寄り添い型健全育成のすすめ～

都筑多文化・青少年交流プラザ（つづき MY プラザ）
館長　林田　育美

はじめに

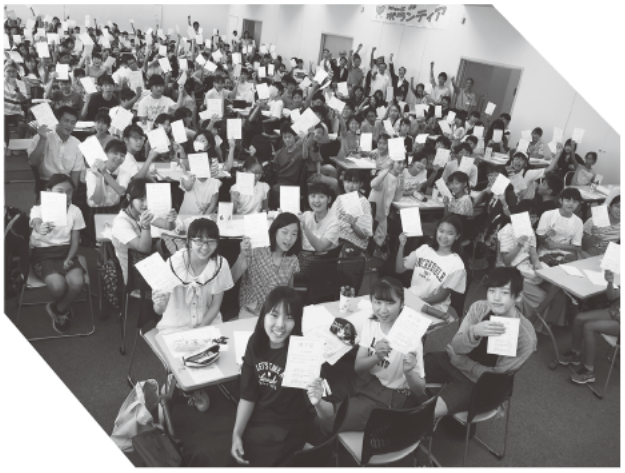
平成 19 年 11 月に開設した「つづき MY プラザ」（以下、「MY プラザ」という）は、港北ニュータウンを擁する横浜市都筑区にあり、国際交流・外国人支援の拠点と青少年の地域活動拠点を併設する特色ある施設です。同じスタッフが同じ場所で二つの事業を担っており、異なる分野を併せ持つことの難しさを痛感する一方、それを強みとするために、それぞれの分野で実施する事業を効率的、効果的に展開し、柔軟性ある施設づくりをしてきました。

MY プラザ事業の進め方

MY プラザでは幅広い視野のもと、さまざまな切り口の事業を実施しています。「外国人」や「青少年」のための地域活動拠点機能を最大限に活かすため、できるだけ多くの協力者を得て地域ネットワークを広げ、多世代・多文化が融合する、参加型の取り組みを進めています。こうした取り組みは、地域とのつながりが希薄になりがちな外国人や青少年にとって大切な体験の場となっており、体験をとおして互いに影響し合う効果を生み出しています。特に青少年は地域の人々にとっての新たなエネルギー源となることも多く、地域の活性化に向けて期待が高まっています。

居場所とは何か　～空間、人、体験活動～

青少年の地域拠点事業に取り組むとき、避けて通れないのが「居場所とは何か」という問いかけです。「居場所」を単なる「空間」としてのみ捉えるのではなく、むしろその中にあるソフトの部分こそ重要と言えます。さまざまな人がいて、魅力ある活動があり、関わりが生まれて、経験を重ねていく。それらがあるからこそ、また来たくなる場所になるのだと思います。特に活動への参加は、地域の大人との関わりや学年が異なる同世代との関わりなど、非日常の体験につながります。成功も失敗も含め、体験を経験に変えていくことは、一人ひとりの自己肯定感につながると考えています。私たちは、そういう体験活動もまた「居場所」ではないかと思うのです。多世代、多文化を受け入れる MY プラザの理念は、「違いを認め、違いを受け入れる」こと。学校や学年、国籍、環境など違いがあるからこそ楽しさがあり、豊さがある。そんな中で、青少年にはさまざまな経験を積んでほしいと願っています。



「はぁと de ボランティア」 ～中高生のための夏休みボランティア体験～

MY プラザは毎年夏休みを利用して、中高生が地域の中でボランティア活動を体験できる機会を提供しています。横浜市都筑区社会福祉協議会、都筑区青少年指導員連絡協議会とともに主催するこの事業は平成 20 年に始まり、現在では「小学 5・6 年生向けプレコース」を加えた大きな取り組みに成長しました。参加者は限られた年代が集う「学校」から脱し、小学生は将来像を描きつつ上の世代と交流し、

中高生は小学生をリードするという、縦のつながりの中で自分の役割を担うことを体験します。受け入れ先となる地域の施設、団体の中には中小企業もあり、地域の社会資源をつなぎあわせたネットワークの中に、小学５年生から高校３年生まで８学年の子どもたちが飛び込んでいきます。多様な個性が地域とつながり、毎年多くのエピソードが生まれています。

STEP UP プログラム ～中高生の「参加」から「参画」へ～

参加するだけのボランティア活動ではなく、中高生が参画できる機会を作ろうと、平成 27 年に「STEP UP プログラム」を開始しました。これは都筑区内にある地区センター４館との連携事業です。プログラムに参加したメンバーが、自分たちの手で翌年度の体験プログラムを企画、実施するというもので、地区センターと MY プラザは、会議室の提供だけでなくメンバーからの相談を受けて地域情報を提供したり、地域の方々につないだりしています。参加者は、１年近くかけて作り上げたプログラムをとおして地域を知り、学校も学年も異なるメンバーが仲間となり、翌年には新メンバーが加わって代替わりを続けます。参加者は「学校が東京なので、地域とのつながりを感じてみたかった」「もっと多くの人に参加してもらい、仲間を増やしたい」など、自らの言葉を発信しています。

子どもたちの声に耳を傾け、受け止める

MY プラザには学校に居場所を見いだせない子どもたちも来ます。学校は行くのが当たり前で、勉強するのが当たり前と思う大人の常識が、社会の中には根強くあります。しかし「なぜ学校に行かないのか」と聞かれても、「なぜ行けないのか」わからず、答えられない子どもたちもいます。「クラスが嫌で学校に行かなくなったけど、今はなぜ行けなくなったのかわからない」と話す子もいます。大人が当たり前と思うことと、子どもたち自身が感じることは必ずしも一致しません。せめて私たちはこのことを受け止め、子どもたちの話を聴き、ニュートラルな大人として寄り添い続けたいと思います。

おわりに　～寄り添い型健全育成の必要性～

青少年の地域活動拠点事業は、健全育成の枠組みの中に存在し事業展開されています。しかしそこには課題を抱える子どもたちも多くいて、傾聴と寄り添いの中で対応しなければならないケースが多々あるのです。そのため「健全育成の取り組み」を「子どもたちを受け入れ寄り添うことのできる健全育成の取り組み」にしていかなければ、子どもたちを受け止めるための充分な事業にはなりません。

今子どもたちに必要なことは、抱える荷物を少しだけ下ろし、前に向かって進むためのきっかけを得て希望を持つことに他ありません。そのため彼らとの関わりにおいて大切なことは、早期に困難の芽に気づき、私たちにできることを考え、見守り、伴走し続けることです。課題の有無に関わらず予防の観点を持ち、多様性を受け入れ、引き出しを多く持ってきっかけを提供する、そんな「寄り添い型健全育成」を実現できる青少年の地域活動拠点が求められていると感じます。

特集 2

2 子どもたちはいつだって、自分自身で成長する ～青少年交流・活動支援スペースの事例から～

公益財団法人 よこはまユース
櫻井　久美子

□青少年交流・活動支援スペースの取り組み

2016 年 4 月に桜木町駅前ビルぴおシティ 6 階に、新たな青少年の交流活動の拠点として「青少年交流・活動支援スペース（以下さくらリビング.[1] と呼称）」がオープンして、3 年が経とうとしています。

さくらリビングでは、これまでの 10 年以上に渡るよこはまユースの「居場所づくり」の運営経験をベースに、「多くの人々が集まる拠点」として運営を展開してきました。“拠点”では、さまざまな年齢層の人々が訪れ、自身の興味関心や価値観まで話せる場づくりを行っています。地域の人々の力を借りて、青少年が社会につながり・社会で生きる力＝「自分自身で社会の中に居場所を見つけていく力」を育むことを目指し、交流や多彩な事業を展開しています。

□ 1 年 1 年の積み重ね

開館した当時はまず、場所を知ってもらうことから苦労がありました。上階は場外馬券売場、下階は呑み屋街という希に見る雑居ビル内の青少年施設ということで、まわりから心配されることもありました。しかし、スタッフが青少年だけでなく、利用する大人にも積極的に声をかけるという日常的な関わりを地道に積み重ねるうちに「この人なら、子どもたちと関わりを持ってもらえるのではないか…」、逆に「青少年の力を借りたいなら、さくらリビングに行くといいよ」と利用者から地域の人々をご紹介いただけることもあり、今では地元中区のみならず、区外の方々のご協力も得ることができるようになってきています。

□地域が若者を包摂する（事例紹介）

例えば、こんな若者（M さん、高校 3 年生、男性）の成長を見ることができました。彼は高校 1 年の冬からさくらリビングを利用するようになりました。初めの定位置は学習コーナー。ひとり勉強でした。そのうち WiFi が使える受付付近へと移動。スタッフとも話しやすい距離になりました。でも彼は、いつもうつむき加減。「俺に話しかけるな！」というオーラを全身に纏っていました。それでもスタッフは声をかけ、かけ続け…。かけ続けて 3 ケ月後の春になったある夜、帰り支度をした彼にいつものように一言かけると、彼は堰を切ったかのように中学までイジメに遭っていたこと、そして、それを避けるためにわざとレベルを落として誰も知り合いのいない高校に進学したこと、でも、そこまでして入った高校では、無理して違う自分を演じていること、そして 2 年になりクラス替えをしたら、知っている人が誰もいなくなっている上に、気づいたら既にグループができ上がってしまっていたこと…などを赤裸々に話してくれました。突然の悲痛な彼の言葉に、「学校で無理して友人作らなくてもいいんじゃない？ここで作ろうよ！！」と応えました。

そんな彼に夏休みの「自分の将来と仕事を考えるワークショップ」への参加を促してみました。それは、地元企業の LED 菜園工場見学と、その野菜を販売している N さんの下、実際に販売体験をしてみるというプログラムです。そこで、彼は N さんから今までの開店までの道のりや野菜に対する熱い思いなどを聞きました。そこでは、N さんに促されながら、学校生活や自分の将来の夢などをいつもより饒舌に話す彼の姿がありました。

■その時を振り返って（M さんから）

工場見学では、小スペースで野菜を多く生産していたことにまず驚きました。中学校の時の新潟での農業体験とまった

く違ったからです。また社員さんから話しかけてくれたので、とても自分のことを話しやすかったです。この当時の自分は人見知りが激しくて、言葉もつたなく、話しづらくしてしまったのではないかという不安が残りました。そして、販売体験では、地域の消費者とＮさんの強い信頼関係と、自分の計算力の無さに衝撃を受けました。時間が経つにつれて多くのお客さんが来店し、接客どころではなかった自分でしたが、Ｎさんはそんな中、一人ひとりに丁寧に声をかけ、野菜の特徴を一生懸命説明していました。自分も大学生になってアルバイトをするようになったら、Ｎさんみたいにみんなに気を配れるようになりたいと思いました。また、自分は暗算ができずにお客さんを待たせてしまいました。この販売体験から、学校の文化祭では、呼び込みや接客を積極的に行いました。クラスメイトに驚かれましたけど…(笑)。

□子どもは自分で成長できる～いくつかの出会いを経て、多少の山なら乗り越える～

販売体験を終えた彼は、わずか４日後には、フリースペースでのカフェに自ら参加し、その１週間も経たずに、今度は大学実習生と一緒に話したり笑ったり、その後、自分の興味のあるアニメ交流会を３回も企画しました。周りに積極的に声をかけ、参加を促す姿に我々は驚くばかりでした。しかし、そんな彼にもまた思い悩む日々が始まりました。それは修学旅行です。心配していたグループ分けはクリアしたものの、３泊もの間、クラスメイトと一緒にいることを危惧していました。また、進学のことで家庭内でもギクシャクしているような時期でした。しかし、そんな心配も必要ありませんでした。彼は難なく自分でそれらを払拭できたのです。

■その時を振り返って（Ｍさんから）

修学旅行はどうしよう…と真剣に悩みました。でも行きのバスで隣に座った子と、ひょんなことからひとこと話ができたんです。その一瞬で不安はなくなりました。今では、自分が自分でハードルを上げていたんだと思います。自分が入ったらその場の雰囲気が変わってしまうのではないか…と、みんなが集まっているところに入っていくのをとまどっていました。またガラケーの携帯しか持っていなかったのも心配要因でした。今ならガラケーでも良かったんだと思います。大事なのは、誰かと話すこと…。携帯は関係なかったんです。今、悩んでいる小中学生がいたら、教えてあげたいくらいです。

□子どもはいつだって成長できる～ほんの少しのキッカケがあれば～

さくらリビングには、青少年に寄り添うスタッフだけでなく、施設利用者や地域の大人がいます。そのような人たちの言葉には、人生の重みがあります。また日頃から関わりの多いスタッフとは違う、新鮮な世界観を運んでくれます。さまざまなバックボーンを持った大人との出会い、関わりは、子どもたちの背中を押す大きな意味があります。

■今、思うこと（Ｍさんから）

現在では、青少年委員.[2] にまでなって、さくらリビングのイベントの司会をしたりと、とてもアクティブになってきました。イベントを通じて話しをする人も多くなり、学校より、さくらリビングの知人の方が多いくらいです。高１の時の自分に、今の自分を見せたら、信じられないのではないかと思うくらいです。性格が 180 度変わりました。

□子どもはいつだって成長できる～ほんの少しの寄り添いがあれば～

Ｍさんから「自分にとって敷居の低い事柄から段々ステップアップすることができた。流れが良かったです」という言葉をもらいました。日頃から、様々なイベントを投げかけることは意識していましたが、気づかぬうちにＭさんが自らプログラムを選んで成長できたのだと思います。

子どもたちは、自分自身で成長していく力を持っています。私たちができることは、学校や地域、世代を越えた多様な人々との出会い、交わりのキッカケを数多く提供し続けること。そしてほんの少し彼らに寄り添うという心掛けを持ち続けること、だと思います。

(Endnotes)

.[1]「さくらリビング」…開所してからつけられた愛称。桜木町にあるリビングのように居心地のよい場所という意味を込めて。

.[2]「青少年委員」…さくらリビングを自分たちの手で居心地よい場にしようとするグループ。現在中学生～高校生 10 名

3 <横浜市子ども会ジュニアリーダー座談会>
地域活動の魅力～若者がジュニアリーダーを続ける理由～

企画・編集　公益財団法人 よこはまユース 事業企画課

地域の中でいきる若者にとって地元はあっても、地域の中で役割や体験を積む機会は多くはないのが現状です。地域行事に若者層の参加が少なくなり、地域活動の高齢化が課題として挙げられています。そこで、今回は、子ども会でジュニアリーダーとして活動する５人に集まっていだき、地域活動との出会いや転機、活動を継続する意味をざっくばらんに語っていただきました。若者目線での、地域活動の魅力や自身の成長の手ごたえが語られています。

横浜市の子ども会とジュニアリーダー

子ども会は、地域を基盤としている異年齢の集団です。

全国子ども会連合会では構成員を就学前３年の幼児から高校３年生年齢相当までとしていますが、横浜の子ども会の殆どは小学生で構成されています。

小学生の間、単位会（主に自治会を中心とした規模）や区子連（区単位）の活動を経験した子ども達が中学生になると、区単位のジュジアリーダースクラブ (JLC) に任意で入会し、ジュニアリーダー（JL）として子ども会活動を支える役割（大人（指導者、育成者）と子どもを繋ぐパイプ役）を担い、事業企画や運営、自己研修など様々な活動を通して成長していきます。

ジュニアリーダースクラブの構成員は、中学生から大学生・勤労青年が中心ですが、横浜では高校卒業相当年齢になるとシニアリーダーと呼ばれることもあります。

区単位のジュニアリーダースクラブの横の繋がりや市レベルでの事業やジュニアリーダー養成研修等に取り組むため、母体である横浜市子ども会連絡協議会の組織に倣って、横浜市ジュニアリーダースクラブ連絡協議会が 1983 年（昭和 58 年）に結成されました。現在は、結成当初に比べジュニアリーダースクラブが組織されていない区が多くなり、中学生以上の青少年の活動組織としての役割が一層求められるようになっています。

※参照：全国子ども会連合会 HP 横浜市子ども会連絡協議会 HP

[話し手]
下田遥菜（19 歳）はなぱん
二本木耀（20 歳）じゃぱん
山本柚香（18 歳）ユズ
藤井和行（37 歳）おかず
広野透（22 歳）とおる
[聞き手]
大槻繁美（よこはまユース事務局次長）

Q. 活動との出会いは何ですか？

「生活の流れの中で活動と出会い、楽しい体験を経て継続へ」

はなぱん：小４の時、夏のサマーキャンプに参加して。親が共働きで忙しくて旅行に行けないから、妹と一緒に「行ってこい」と言われて、キャンプに行ったのがきっかけ。

とおる：僕もサマーキャンプ。はがきが来て「キャンプの案内かな」と思ってよく読まずに参加に○をして返信したら総会の案内がきて、ジュニアリーダースクラブ（以下、ジュニアと略す）に入会しますか？にも○と。「制服で来て」という案内が来て、「あれキャンプに制服？」と思いながら総会に参加した。

おかず：自分も小４でのキャンプから。親が共働きで、きょうだいが５人いて、自分は４番目。キャンプに行ったら役割があってジュニアのお兄さんに初めて一人前に扱ってもらった。印象に残っているのが、薪割

りをさせてもらったこと。小５でのキャンプでは、水源の川で洗剤を使わず洗い物をしたこと、目を開けても真っ暗闇を体験したこと、雷が落ちて「怖いね」って言いながらみんなで裂けた木を見たことが強烈な体験として残っている。

じゃぱん：自分は中２の時に友達からジュニアについて教えてもらって、友達が参加するというので自分もジュニアのレクリエーションに参加したことがきっかけ。新鮮ですごく楽しかった。でも、次にキャンプに参加した時は勘違いしてしまって、中学２年生でリーダーのはずなのに参加者気分で遊ぶ気満々だったけど、班付きリーダーとして２泊３日、子どもの面倒を見る体験をした。サポートしてくれる人はいたけど、自分の役割がわからなくて、不安でもやらなければいけないことがあって、でも経験したことがないからできなくって。先輩の高校生から、調理の仕方とかも教えてもらったりで、スキル系のことはほぼできなかった。でも、ウォークラリーの時に、班員と話をしながら楽しく活動していただけだったけど、先輩から「よくみんなのこと見ていた」と言われたので、それはうれしかった。できないことばかりで困惑していたので、やっと褒められたという体験だった。

Q.　活動継続の分岐点は？

「学校との両立や親の理解」

はなぱん：部活や進路、中学から高校に変わるとき、高校から大学、就職への移行期に活動を続けるかどうかの判断をすることが多い。

おかず：高校の時に友人に誘われて入った野球部が強豪だった。部活は３カ月で辞めてしまったけれど、その間野球をしながらジュニアの運営委員長もやっていた。当時は大変だったから必死だったけど、やりがいを感じて、ジュニアの運営は継続できた。

はなぱん：役割があると続くよね。私も高校生になってジュニアの執行部（運営側）に入って、学校では週６の部活に入っていたけど、同時に子ども会は週３くらい会議があって。しぶしぶ行った時もあったけど習慣づいてしまって、日常生活の一部になってしまった。抜けるに抜けられないし、なくなったら寂しいと思って続けている。

とおる：親の理解がなくてやめていく仲間もいる。すごくもったいない。本人は行きたいんだけど、親から行くなと止められたり。親からすると学校の部活動だと何やっているのか分かり易いが、ジュニアの活動は見えにくいよね。

はなぱん：ジュニアの会議が夜の事が多くて親に勘違いされちゃう。遊んでるだけじゃないかとか。実際に親は活動を見ているわけではないし、活動に参加したこともないので、「なんで同年代の人と集まって遊んでいるの？」って感じで。

Q. やりがいは？

「自身の変化や成長の実感」

はなぱん：やりがいがあって友達もいっぱい増える。小学生の時から、他校の子とも知り合える。

とおる：そうそう、子ども会の活動で恥かいても学校に戻っても何も言われないし。

はなぱん：学校では聞き役になることが多いのに、この間たまたまジュニアの活動の雰囲気で話をしたら、学校の友達から「話をする子だったの知らなかった」とギャップに驚かれて、たぶん、無意識にキャラが変わっていることはあると思う。

ユズ：感情を感染させるというイメージを持っている。自分が笑うと周りも笑ってくれるし、特に子どもは雰囲気を感じてくれる。いま、演劇系の専門学校に通っていて、役に入るときのスイッチは似ているかもしれない。ジュニアと今の道はつながっていると思う。

おかず：チームワークとかグループで働くことを学ぶ絶好の機会になる。指示することや人の話をよく聞くこともジュニアだと自然と場数が踏めて、仕事でもすごく役立っている。

じゃぱん：もともと引っ込み思案な性格だった。あまり自分から前に出ることはなくて、でもジュニアで役割として人前に立つことに慣れてきて。例えば企画しなきゃいけない時も率先できたり。性格が変わったというより、考え方ややり方がわかってきた感じ。

とおる：確かに、人前に立つための力がつく。学校ではそういう経験がなくて、先生にあてられて何か発表するくらい。それがジュニアでは人前に立つのが日常茶飯事。人前に立って、何も知らない子どもに伝えるのってとても力がいる。会社でも研修の時など、上司の前でスピーチする時に、僕の頭の中では上司を子ど

も達に見立てて、自分のやってきたことをいかにかみ砕いて子ども達に説明するかという視点で発表している。そうしたら、聞きやすかったよというフィードバックを得られたり褒められたりした。

ユズ：ジュニアになろうと思ったのも続けているのも同じ理由で、自分がやっていて楽しかったことを他の人にも広めたい。学校が自己を育てるところだとすると、子ども会は他者に対する気持ちを育てる、それを指導するのが私たちなのかな。

Q. 悩みや課題は？

「社会への発信と薄れていく地縁を“選択縁”に広げられるように」

とおる：選択肢の多い都心部での地域活動は大変だと言われる。都心部に住んでいるからこそ、日常的に体験できない山での活動や、薪を使った火起こし、料理をプログラムに入れている。地方では当たり前に行っている農業系のプログラムや自然体験が当たり前にはできないので、活動にあえて取り入れることを意識している。

はなぱん：保護者との連携については地域性があって、保護者との関係性も異なる。どこでも、子どものために一緒に取り組めると良いな。

おかず：ジュニアは子どもと大人をつなぐパイプ役。遊びの要素とボランティアの中間で、自由にフレキシブルに変わっていいっていうのが強みでもあるけど、それが社会に対しての発信や説明のしにくさにもつながっているのかも。

大槻：地縁組織が母体の活動だけど、現在は自分の住んでいる地域にジュニアの活動がなければやりたくてもできない、活動したいと思った若者が参画できるようにしていくことが課題かなと思う。

Q. 改めて継続の秘訣

「自分を理解してくれる人がいる、帰ってこられる場所がある」

とおる：人との縁。転機は、高校２年生の時に参加した福岡での指定都市大会[*1]。政令指定都市のジュニアリーダーが集まってみんなで一緒にキャンプをした。そこで出会った人たちといまだにつながっている。日本全国から来ていて、方言も文化も違う。でも、同じことをやっていて、それがおもしろいなと。プライベートでも各地に行ったら連絡して遊んだり助けてもらったり、泊めてあげるよとか。

はなぱん：私も指定都市大会の影響は大きい。私も高２の時に横浜の大会でスタッフとして活動して友達がたくさんできた。もちろん、高校でもボランティアしているっていうと単位がもらえたり、大学のAO入試でもジュニア活動をプレゼンできたりとメリットは多くあったけど、子ども達とキャンプに行って楽しかったことやプライベートが充実したことが継続している一番の理由かなと思う。趣味が合う人とか、わかってくれる人、フォローしてくれる人、そして私を理解してくれる人の存在、それが続ける理由。

大槻：会社には定年制度があるけれど、地域の人は一生もの。一生ものの居場所を確保できる幸せを感じる。

この座談会を受けて、若者が地域で活躍する要素として３点が明らかになったと思います。第一に、出会える接点づくりをすること。座談会に参加してくれた５人の若者は、全員が子ども期（小中学生）に「子ども会」という地域活動と出会っています。そこから、キャンプや友人、学校外の仲間との交流が契機となって活動が充実し継続につながっていると話していました。

第二に、活動を継続できる環境整備です。活動を継続できるかどうかは、本人の意思だけではなく、学校との両立や親の理解にもよるところが大きいことがわかりました。学校・家庭・地域が若者の置かれている状況を理解し、応援者となれるような環境整備が求められます。

第三に、地縁から選択縁へと広げていくこと。子ども期に地域活動と出会えなかった人や、一度離れてしまった人が自分の意思で地域活動へと入っていくことのできるしくみづくりも大切です。地域活動は、一度卒業してしまうと戻れない一方通行の場ではなく、身近にずっとある場所でもあるからです。その方が、若者が活躍できる地域コミュニティになるのではないかと思います。

(Endnotes)

*1 指定都市大会とは…全国子ども会連合会ブロック研修会の一つ。成人（指導者・育成者）対象とジュニアリーダー対象の２つの大会を当番市（指定都市持ち回り）が全国子ども会連合会と連携して毎年開催している。＊参照：全国子ども会連合会HP

4 地域通貨「べる」をつかった青少年支援の現場 京都市山科青少年活動センター

公益財団法人 京都市ユースサービス協会
玉村　文

地域で生きる若者達の成長を保障するには、子ども・若者が安心して地域に参画できるしかけが必要です。今回は、そんな実践の中でも地域通貨というアイディアを取り入れた京都市山科青少年活動センターの事例を紹介します。

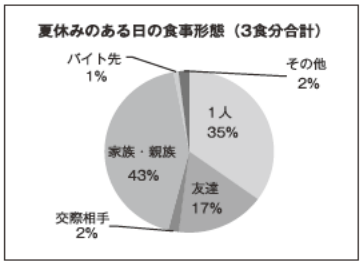
山科青少年活動センター（愛称：やませい）は、公益財団法人京都市ユースサービス協会が受託運営している青少年活動センターで、「青少年の課題解決につながる仕組みを地域社会と協働でつくる」ことをテーマに掲げる公共施設です。ここでは、青少年の居場所づくりや、地域の中で若者が役割を担う場づくりを行っています。

つぶやきを拾う機能

やませいには、カフェ風に改装された料理室があり、そこでは週に 1 回程度、軽食を提供する事業を行っています。子ども食堂のような機能をもち、ブームになる前から取り組んでいます。その背景として象徴的な光景が、カップラーメンのお湯を待つ行列です。地域の中高生が学校帰りにやってきて、購入したものをロビーで食べる光景が日常的に見られます。そこでのやりとりからは、給食がまずいから食べていないという声や、野菜のことを指して「葉っぱなんか食べられへん」と言う中高生の実態が見えてきました。そこで手作りの温かい軽食を安価で提供し、一緒に食べながら寄り添う取り組みを始めました。食べながら友達や恋人関係の悩み、進路への不安などが湯気と共に吐き出されます。職員は、そんなつぶやきを拾って、気にかけ、必要な情報提供をし、支援機関へのリファーへ発展することもあります。余談ですが、恋愛相談が多いこともあって、やませいを利用する中高生の「デート DV」という言葉の認知度は高く感じます。

10 代～ 20 代の若者の実態

ここ 5 年ほどで日本全国に多くの「子ども食堂」ができましたが、子ども食堂の主な支援対象は小学生以下の子どもです。一方で、中高生や大学生がサービスの受け手になる場づくりは整っているのでしょうか。どちらかというと、大学生はボランティアなど担い手として位置づけられています。それはとても良い事ではあるのですが、かれらにも食の課題がないわけではありません。（公財）京都市ユースサービス協会では、2016 年の夏休みに食の実態調査を行いました。そこでは、個食・孤食の問題や、朝ごはんを食べていない欠食率の高さも明らかになりました。大学生も同様です。大学生年代はボランティアとして子ども支援の役割を担っていますが、実はサービスの受け手にも担い手にも相互に移行可能にしておくことが大切なのです。

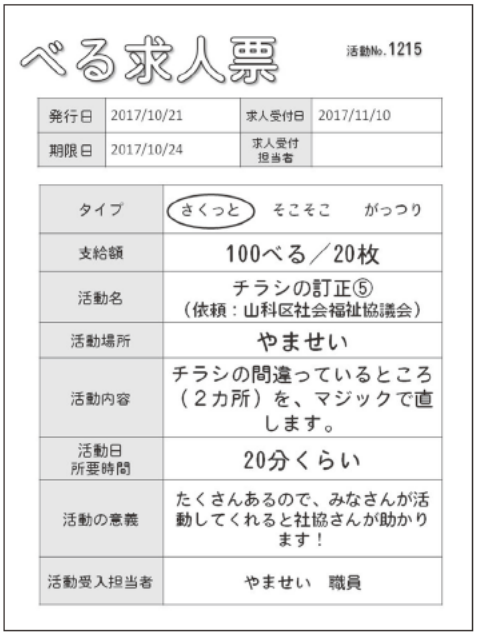


＊ 2016 年 7 月 25 日～ 8 月 22 日
「夏休みの食事調査」対象：中学生から大学生、343 名から回答を得た。
回答場所：京都市内 7 カ所ある青少年活動センター内「朝・昼・晩、それぞれ誰と食事を共にしたか？」を尋ねた回答。

サービスの受け手だけでは終わらせない ～地域通貨「べる」を使った仕組みづくり～

共食の機会提供をしたくても、お金を稼ぎようがない中学生からお金をとれないということも課題です。一方、無料で与えることで依存を強める可能性や、子ども・若者を保護するという観点が強まり、一人の子ども・若者としての人格の尊重や成長支援とは別の議論になる可能性も指摘されます。それをうまくクリアしている事例を探したところ、NPO 法人暮らしづくりネットワーク北芝（大阪府箕面市）で行っている実践がありました。これをモデルに、2015 年から円に替わる通貨として「地域通貨」を作り、地域活動をすることで地域通貨「べる」を得られる仕組みづくりを始

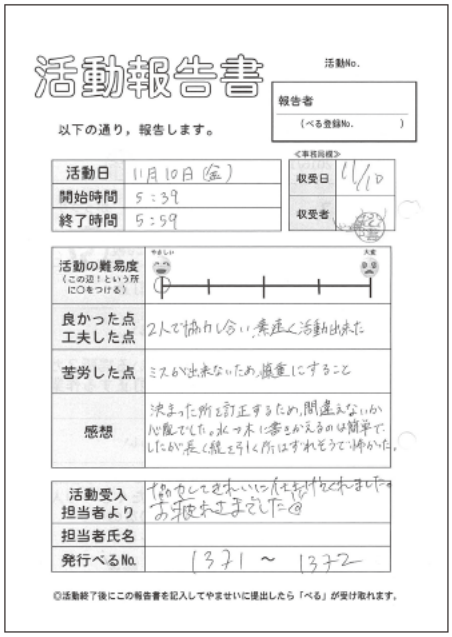
（べる求人票と活動報告書）



べる求人票　活動No. 1215

発行日	2017/10/21	求人受付日	2017/11/10
期限日	2017/10/24	求人受付担当者	

タイプ	さくっと　そこそこ　がっつり
支給額	100べる／20枚
活動名	チラシの訂正⑤（依頼：山科区社会福祉協議会）
活動場所	やませい
活動内容	チラシの間違っているところ（２カ所）を、マジックで直します。
活動日所要時間	20分くらい
活動の意義	たくさんあるので、みなさんが活動してくれると社協さんが助かります！
活動受入担当者	やませい　職員



活動報告書　活動No.

報告者（べる登録No.　　）

以下の通り，報告します。

<事務局欄>

活動日	11月10日(金)	収受日	11/10
開始時間	5:39	収受者	
終了時間	5:59		

活動の難易度（この辺！という所に○をつける）	やさしい　大変
良かった点 工夫した点	2人で協力し合い、素直に活動出来た
苦労した点	ミスが出来ないため、慎重にすること
感想	決まった所を訂正するため、間違えないか心配でした。水っ木に書きかえるのは簡単でしたが、長く線を引く所はずれそうで怖かった。
活動受入担当者より	協力してさすいに点をつけてくれました。お疲れさまでした@
担当者氏名	
発行べるNo.	1371 ～ 1372

◎活動終了後にこの報告書を記入してやませいに提出したら「べる」が受け取れます。

めました。地域の商店や施設も協力団体（べるパートナー）として加わってもらい、地域活動を提供してもらいました。例えば、山科区社会福祉協議会からはチラシの訂正作業を、子育てネットワークからは「カプラで遊ぼう！」のスタッフとして乳幼児の遊び体験コーナーを企画運営するなど、「べる」活を提供いただきました。

「べる」とは、学べる・遊べる・食べるという思いが込められたネーミングです。やませいの中には掲示板があって、そこに「求人票」を貼りだしています。中高生たちはそれぞれ自身の興味のある、実行可能な活動を選び、参加していきます。そこで得た「べる」をやませいで実施するカフェや、子ども食堂、協力団体の指定する店舗で使えます。実際に、700べるを使って、協力店のカフェで食事をした若者の存在も報告されています。「べるパートナー」の地域の文具店は、小売店に買い物に来るお客さんが減る時代に中高生と交流が増える機会になると期待を寄せています。

地域活動と青少年の出会い

地域通貨「べる」がほしい、それを使ってご飯を食べたいというシンプルなニーズが出発点になることも多いです。しかし地域活動をすることで、地域の大人から「ありがとう」と言われ、自分の行動が地域の役に立っているという「役立ち感」を得られる体験にもつながります。例えば、引っ込み思案でスムーズに言葉が出てこない中高生が、小さな子どものお世話や高齢者とのかかわりで、自身の力を発揮できることがあります。同年代の仲間づくりでは自信を失っていた中高生も地域の仕事を引き受けることで自信を取り戻したりします。

他方、思春期の子ども達にとっては、同調圧力から素直に大人の手伝いや地域活動に参加することにためらいが生まれることもあります。ボランティア活動に興味はあっても、知り合いに見られるかもしれない屋外の活動は嫌だという中学生に出会ったこともあります。「地域通貨を得るため」という建前の理由があることで、安心して参加できるしかけにもなっています。これまで地域からは何を考えているかわからない、生意気な子どもと思われていた中学生が、地域で活動することで大人からの見方が変わるという地域の声も聞こえてきます。

さいごに

以上のように、やませいは地域通貨「べる」や食をツールとして、地域の中で青少年の育ちを支えています。

これらを通して、安心して過ごすことのできる居場所が多くあること、地域の一員として過ごすことができること、地域で成長を支える基盤を作っていくことで、食べる・遊べる・学べる「あたりまえ」を子ども・若者に保障していくことができるようになるのです。

より詳しい仕組みは「京都市山科青少年活動センター　地域通貨べる」をチェック。

データで見る青少年

横浜市内の中高生と保護者に聞いてみました！

「中高生は放課後をどこで過ごしている？」「保護者が求める放課後の過ごし方や体験活動って？」

平成 30 年度「中高生の放課後の過ごし方や体験活動に関するアンケート」調査レポート

今回のアンケートでは、中高生の放課後の過ごし方と居場所意識、体験活動と青少年の興味関心や意欲について、過去に実施した調査[1]に基づき、あらためて実態を把握するという目的で、中高生とその保護者を対象に次の項目で実施しました。

①放課後の過ごし方と居場所の意識
②体験活動と興味関心や意欲の傾向
③中高生の保護者の傾向

調査結果のポイント

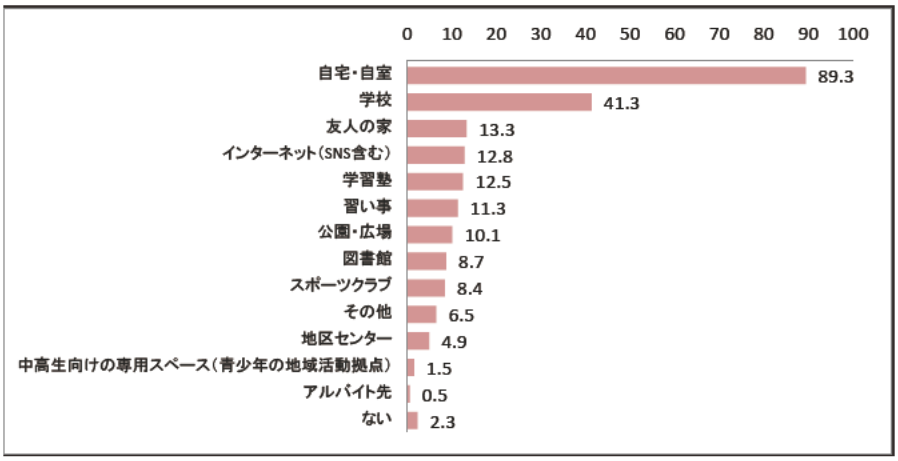
①中高生は約９割が「自宅・自室」を居場所だと感じている。
②社会体験が豊富な人ほど、社交性、挑戦意欲、やり抜く力が高く、社会性や自立心、自己肯定感が高い人ほど、他者との関わりに積極的である。
③保護者は学習だけでなく社会で役立つ体験やスキルの獲得など、将来に向けた実利ある経験を求める傾向が高い。

[1]：「青少年の居場所に関するアンケート調査」（平成 28 年度実施、市内中高生対象）及び「青少年期の体験活動・社会活動に関する実態調査」（平成 29 年度実施、市内 20 歳代～ 60 歳代対象）

中高生の約 90%が「自宅・自室」を居場所だと感じている

■中高生にとって「家」は最も基本的な居場所と捉えている結果となった。一方、「自宅・自室」の回答の多さは、社会とつながる意識の希薄さや日常の抑圧から解放されたいという意識を表しているとも考えられる。

Q居場所だと感じる場所（複数回答）　〔n＝9,414〕

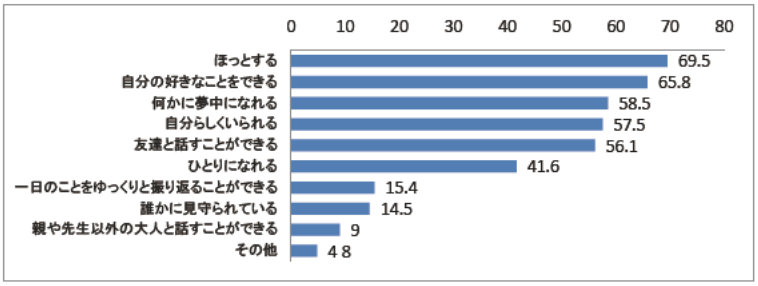


トピック

安心感を求めるだけではない居場所のイメージ

■ 中高生が居場所だと感じる場所は安心感を求める「ほっとする」が一番多いが、「自分の好きなことができる」をはじめとして、勉強であれ部活動であれ何かに取り組むことや、他者との比較や関係性によって生じる項目が選ばれている。中高生がイメージする居場所とは、自己の安心を得られるのはもちろん、何かと関わることを意識したイメージで捉えていることがわかる。

Qあなたが居場所だと思う場所（複数回答）〔n＝9,414〕

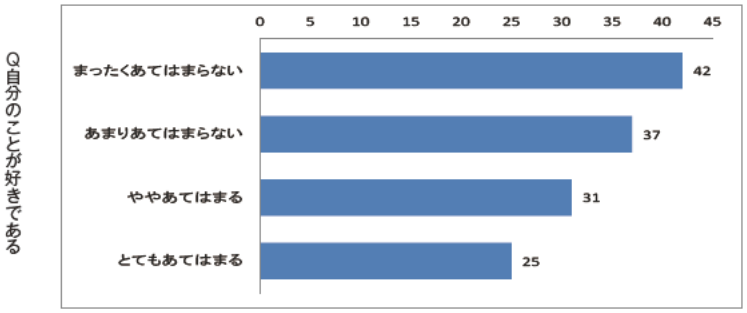


青少年の自己肯定感とサードプレイスの相関

■「Q 自分のことが好きである」と「Q あなたが居場所だと感じる場所」でクロス集計を行なったところ、自己肯定感が低い青少年ほど、サードプレイス[*2]を持たない傾向にあることがわかった。青少年が多様な価値観に触れることのできる場の重要性が垣間見える。

[*2]：学校・家庭・学習塾等以外の第三の場をサードプレイスと定義。

青少年の自己肯定感とサードプレイスの相関

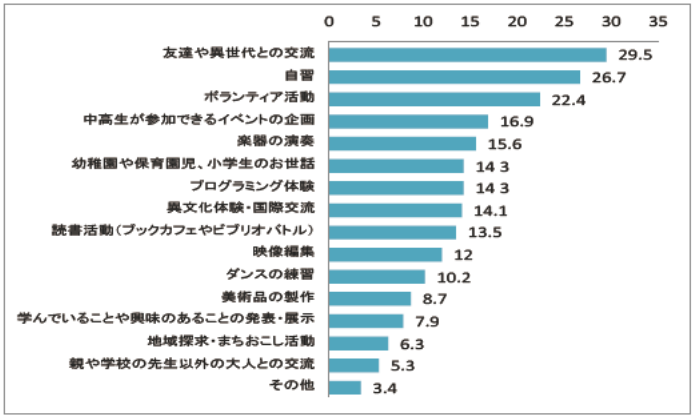


※サードプレイスを持たない割合

青少年の地域活動拠点では、幅広い交流と多様な体験活動を求めている

■青少年の地域活動拠点では、友達や異世代との交流、学習といった居場所としての機能とボランティア活動や趣味の活動をはじめ、多様な体験機会の場を求めているという傾向がみられた。

Q「青少年の地域活動拠点」ではどのような活動をしたいと思いますか（複数回答）〔n＝9,414〕



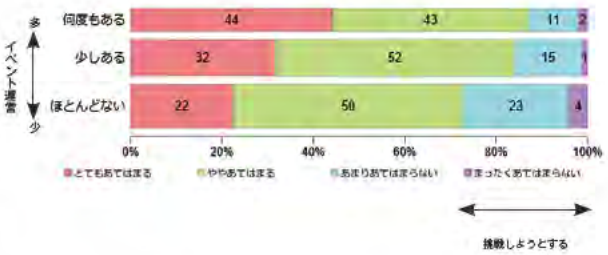
社会体験が豊富な人ほど、社交性、挑戦意欲、やりぬく力が高い

■社会体験と興味関心や意欲との関連を見てみると、社会体験が豊富な人ほど、社交性、挑戦意欲、やり抜く力が高い傾向となった。また、社会性や自立心、自己肯定感を問う項目で「ある」と回答した人は、他者との交流や他者への発信において積極的である傾向が見られた。これは大人を対象に実施した実態調査[*3]で示された青少年期の体験活動が社会性を育むという傾向が、中高校生世代でも同様の結果となった。

[*3]：「青少年期の体験活動・社会活動に関する実態調査」（平成 29 年度実施、市内 20 歳代～ 60 歳代対象）

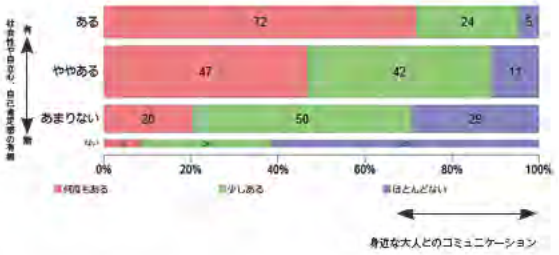
【社会体験×やりぬく力】

【Q自身でアイデアを出したり、他者と協力しながらイベントの運営に携わること×Q失敗してもあきらめずに挑戦しようとする



【社会性や自立心、自己肯定感の有無×社会体験】

Q社会性や自立心、自己肯定感の有無（合成変数）×Q近所の人とのコミュニケーション

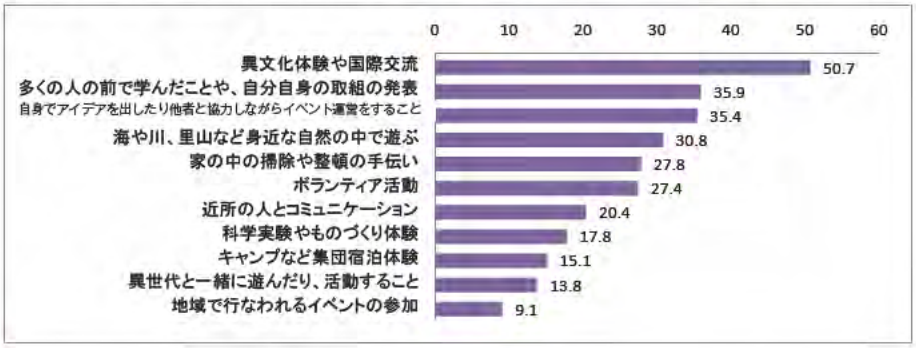


中高生の保護者の傾向

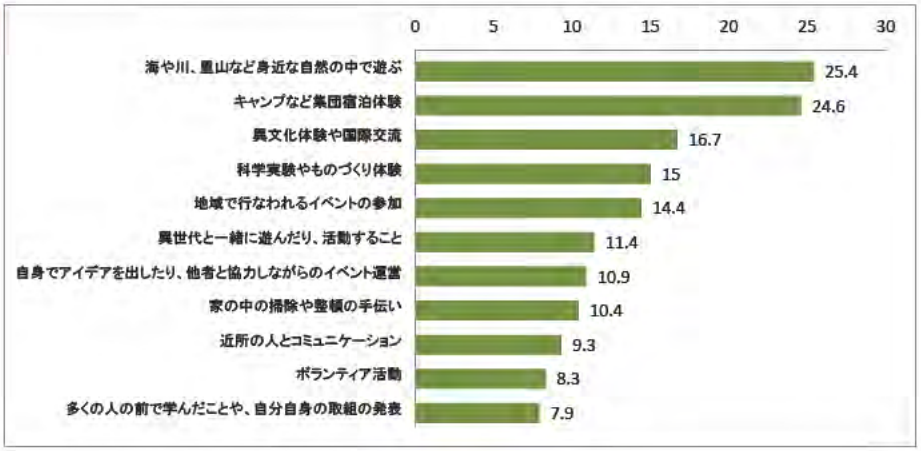
子どもには社会に出てから役立つ体験やスキルを獲得させたい

■保護者が子どもに体験してほしいと考えているのは、将来、社会に出た時に役立つ体験やスキルであり現実的で直接的なものである傾向が読み取れる。社会的な不安を背景に大人が中高生に求めるハードルが高くなっていると推測される。これに対して、中高生は自然体験など非日常体験を求める傾向にあり、大人とは明らかに違う結果となった。

Q中高校生時代のうちにより多く体験させたいこと（4 つまで回答）　〔n＝4,926〕



比 較　中高生回答　Q中高校生時代のうちにより多く体験したいこと（4つまで回答）〔n＝9,414〕



参　考

社会の変化に不安を抱く保護者の意識

■子どもを取り巻く環境や知りたい情報は「進路（進学／就職）」、「スマホ・ネット利用」、「相談できる人や場所」の順で回答があった。近年変化する受験制度や就職活動、いじめや犯罪にも繋がるスマホ・ネットの利用、あるいはこれらを含め諸々の相談ができる窓口を求める傾向は社会の変化に不安を抱く保護者の意識の表れであり、相談できる人や場についての情報の発信が求められていると考えられる。

Qお子様自身やお子様を取り巻く環境について知りたい情報（複数回答）〔n＝4,926〕

おわりに

過去の調査に基づき、あらためて中高生の実態とニーズを把握するという目的で放課後の過ごし方と体験活動に関する意識や傾向の回答をいただきました。そこからは中高生は家を安心感の得られる自己再生の場としながらも、居場所では被受容感や自己肯定感を得ること、誰かとつながること、何かに取り組むことを求めている傾向にあることがわかりました。また、保護者が必要と考える体験と中高生が求める体験とは大きな違いがあることも明らかになりました。そして、社会体験が豊富な人ほど社交性、挑戦意欲、やり抜く力が高い傾向が見られることは、多様な体験が青少年の育ちにとって良い影響を与えることをあらためて示した結果となりました。

このことから、家や学校以外に多様な価値観に触れられる機会が多くあることは中高校生世代にとって必要であり、地域や社会と関わりながら様々な体験を積み重ねていける環境を整えることは、将来を担う青少年の育ちに欠かせないことだと考えます。

今回の調査結果が、青少年育成活動や、青少年支援活動に結び付いていくことへの参考になればと思います。

【アンケート実施概要】

■実施時期：平成30年6月～平成30年9月

■調査対象及び実施方法

①市立中学校（第2学年）
- ・集計校：36校　／36校中、回収率100%
- ・回答数：生　徒：4,416人／5,084人中、回収率86.9%
- 　　：保護者：2,605人／5,084人中、回収率51.2%

②市立高等学校
- ・集計校：7校／7校中、回収率100%
- ・回答数：生　徒：4,998人／5,680人中、回収率88.0%
- 　　：保護者：2,321人／5,680人中、回収率40.9%

③県立高等学校
- ・対象校：53校
- ・回答数：生　徒：435人／41,642人中、回収率1.0%
- 　　：保護者：305人／41,642人中、回収率0.7%

※実施方法や回答数をふまえ、本稿分析は県立高校データを含めずに行なった。

■調査監修：土屋隆裕（横浜市立大学）

■協　　力：北村克久研究室（鎌倉女子大学）

ヨコハマの子ども・若者の成長を応援する人たちのための情報誌

YOKOHAMA　EYE’S　2018

2019年３月　発行

■編集・発行
公益財団法人 よこはまユース
〒231-0011　横浜市中区太田町 2-23　横浜メディア・ビジネスセンター５階
TEL：045-662-4170　FAX：045-662-7645
Mail：kikaku@yokohama-youth.jp
URL：http://www.yokohama-youth.jp/